

在宅医療推進委員会から

在宅訪問初体験記 「在宅訪問 はじめの一步」

委員 高橋 諭

私どもの薬局は一関駅から南東にある団地内にあります。

在宅訪問を始めようと考えた2015年当時、地元新聞に【在宅高齢者実態調査結果】の記事が目にとまりました。在宅高齢者実態調査は高齢化率のほか「ひとり暮らし・高齢者のみ世帯数と割合」や「認知症高齢者・援護を要する日中独居高齢者の人数」などが市内の地域ごとに集計されます。一関市の高齢化率は、全国の28.1%（内閣府ホームページ）よりも高く、中には40%を超える地域も複数見られます（下表）。

● 令和元年度 一関市在宅高齢者実態調査集計表（65歳以上）

地域	一関	花巻	大東	千厩	東山	室根	川崎	藤沢	計
総人口①	56,586	12,838	13,201	10,610	6,437	4,866	3,557	7,727	115,822
世帯数②	24,259	4,713	5,016	4,114	2,313	1,804	1,289	2,824	46,332
65歳以上人口③	17,806	4,909	5,674	4,076	2,562	2,067	1,437	3,126	41,657
75歳以上人口④	9,413	2,675	3,267	2,308	1,478	1,171	827	1,738	22,877
認知症高齢者数⑤	241	57	98	116	67	29	22	83	713
援護を要する日中独居高齢者数⑥	171	98	73	66	45	27	34	36	550
ひとり暮らし高齢者世帯⑦	2,426	529	677	474	245	198	148	279	4,976
高齢者のみ世帯⑧	2,206	481	672	539	277	225	155	348	4,903
高齢化率③/①	31.47%	38.24%	42.98%	38.42%	39.80%	42.48%	40.40%	40.46%	35.97%

（令和元年10月1日現在） 一関市HPより（改変）

私どもの薬局のある団地も、ここ数年で空き家が目立つようになり、高齢者が多いことから、団地内でも同様に支援を必要とする方が一定数いるのではないかという危機感が募ってきました。

ですので、ここ数年で本格的に在宅訪問の準備をはじめたのですが、在宅訪問開始はいつも薬局に来ていた方からのこんな相談がきっかけでした。

「ここ数日、薬の飲み方がわからない。携帯電話の使い方もわからない。自分が自分じゃないみたいでとても不安なの。」

原因は肝性脳症でした。その場で主治医に外来服薬支援の指示をもらい一包化し、配薬カレンダーに薬をセットして服薬支援を行いました。あわせて、受診勧奨をした後に入院加療となりました。

退院後、ほどなくして今度は、「アミノレバンの量が多くて飲みづらい。飲めない事を言うとヘルパーや医師に怒られるので残った薬を薬局で預かって欲しい!」と言うのです。

これは薬剤師による在宅訪問が必要ではないかと考え、ケアマネジャーに相談すると、「薬剤師の在宅訪問は何をするのですか？配薬や服薬の確認はヘルパーがやっています。」と言われ、薬剤師による在宅訪問への理解度の低さにやるせなさを感じましたが、アミノレバン服薬の重要性と溶解量を減らす方法があること、便通コントロールの必要性などを説明し、最終的には主治医の了承も得て在宅訪問に関わることになりました。

その後、アミノレバンのアドヒアランスは改善され、意識レベルと理解力が回復しました。QOLが明らかに向上し、本人も不安が減ったと笑顔が見られるようになりました。

そんな時、ケアマネジャーから「実は変なことがあって・・・、先日ちょっとおかしな行動があり警察にお世話になってしまった。これは、この方の性格なのでしょうかね？それとも、病気のせいなのでしょうかね？原因によっては対応が変わってくるので医療側の意見を伺いたい。」と相談がありました。

アンモニア値も基準値内に下がってきた頃だったので、主治医の意見も確認したいと思い、面会しました。「アンモニア値は、検査時には基準内におさまっているが、変動があるので食後などは肝性脳症で異常行動が出てもおかしくはない。」との結果を伝えると、「間に入っていただいて助かります。ありがとうございます。」と言われた時に、医療と介護の間を取りもつことが出来たように感じました。

何度もキャンセルしていたデイサービスに行くことが出来るようになるなど患者さんの体調管理がうまくいったこともあり、ケアマネジャーとの信頼関係を築くことが出来たことは非常に自信につながり、やってよかったなあ実感しました。在宅訪問は他職種との関りが多く、各々の役割を理解しながら、いかに連携をとるかが大切であるかを学ぶことが出来ました。

「物から人へ」と調剤報酬体制の方針転換がいられています。私自身、今まで通りのカウンター越しの投薬だけでは不安を感じることもあり、支援を必要とする患者さんにどのように対応するか、日々の仕事の中でも考える場面が多くなっています。医療と介護の切れ目のない支援がなされるのが今後の課題であると考えています。